

美術科教育法における高岡工芸高校での研究授業報告 とこれからの課題

Report of Practice Teaching at Takaoka Crafts High School in Art Education Class

● ペルトネン純子／富山大学芸術文化学部

PELTONEN Junko / Faculty of Art and Design, University of Toyama

● Key Words: Art Education, Practice Teaching, Teacher Education, Design Education

要旨

富山大学芸術文化学部の美術科教育法では、実際の教育現場からの学びを重視したいと考え、2012（平成24）年度から富山県立高岡工芸高等学校と連携し、高校生を対象にした研究授業の実施を通して教員養成を試みている。本稿は2012（平成24）年度から2015（平成27）年度に実施した4回の研究授業概要報告とともに、研究授業を受けた生徒から得た合計146枚のアンケート回答をもとに考察し、多数の指導者で実施する研究授業の課題として次の5つを見出した。①生徒の個別質問や困惑に対する指導や配慮、②学習テーマにあわせた板書や配布資料を活用した情報の絞り込みと情報の深さ、③生徒を不安にさせない声量・声色・態度で授業に取り組む、④学習理解を深めさせる学習キーワードの活用、⑤グループワーク、プレゼンテーションの活用。

1. はじめに

富山大学芸術文化学部で取得できる教育職員免許状は「中学校教諭一種免許状（美術）」と「高等学校教諭一種免許状（美術）」である。本学部は富山県で唯一、それらの免許状を取得できる教育機関でもある*1。

本学部の美術科教育法では、実際の教育現場からの学びを重視したいと考え2012（H24）年度から富山県立高岡工芸高等学校（以後、高岡工芸高校と略す）と連携し研究授業の実践を始めた。通常の授業においては単独で指導を行うが、本研究授業は美術科教育法という授業科目を履修する学生達で指導するため、高校生にとっても学生にとっても特殊な教育方法になっている。そこで本研究は、研究授業後のアンケート結果をもとに、これまでの研究授業における成果と課題について考察し、今後も継続して行う予定の研究授業にいかそうとするものである。

2. 高岡工芸高校との教育連携の概要

高岡工芸高校と教育連携をはじめたのは、2012（H24）年度からである。本研究者が芸術文化学部において美術

科教育法Ⅰ及びⅢを担当することになった時からである*2。そして2013（H25）年度からは、美術科教育法Ⅰ、Ⅱ及びⅢも担当することになり、高岡工芸高校との教育連携はより連続性のある教育になった*3。

高岡工芸高校でこれまでに研究授業をしたのは、表

表1 高岡工芸高校との教育連携の概要

	開講時期	授業名	担当者	履修者数	実習概要
1	2012 (H24)	美1	(芸文) 齋藤晴之、 ペルトネン純子 (高校) 佐藤克己	23名	・授業見学
2		美3	(芸文) 後藤敏伸、 ペルトネン純子 (高校) 本野佳司子	14名	・事前指導 ・研究授業
3	2013 (H25)	美1	(芸文) ペルトネン純子	18名	—
4		美2	(芸文) ペルトネン純子、 平田昌輝 (高校) 本野佳司子	9名	・授業見学
5		美3	(芸文) ペルトネン純子、 平田昌輝 (高校) 本野佳司子	5名	・授業見学 ・事前指導 ・研究授業
6	2014 (H26)	美1	(芸文) ペルトネン純子 (高校) 本野佳司子	12名	・授業見学
7		美2	(芸文) ペルトネン純子、 平田昌輝 (高校) 本野佳司子	17名	・事前指導1
8		美3	(芸文) ペルトネン純子、 平田昌輝 (高校) 佐藤克己	12名	・事前指導2 ・事前指導3 ・研究授業
9	2015 (H27)	美1	(芸文) ペルトネン純子	24名	—
10		美2	(芸文) ペルトネン純子、 平田昌輝 (高校) 佐藤克己	11名	・授業見学 ・事前指導1
11		美3	(芸文) ペルトネン純子、 平田昌輝 (高校) 佐藤克己	10名	・事前指導2 ・事前指導3 ・研究授業 ・事後指導
12	2016 (H28)	美1	(芸文) ペルトネン純子	14名	—
13		美2	(芸文) ペルトネン純子、 平田昌輝 (高校) 佐藤克己	14名	・事前指導1 ・事前指導2

1の下線で示した通り、2012年、2013年、2014年、2015年の合計4回。各年度における研究授業概要は表2の通りである。

表2 高岡工芸高校で実施した研究授業の概要

実施年度	学年	生徒数	授業担当者の人数	題材名	題材目標
2012	1	40	13	レンダリングの基礎	デッサンの基礎を習得し、完成予想図という想定のある物を描く技術にいかす。
2013	1	40	5	マカロニで立体作品をつくらう	素材の持つ特徴や面白さなどをいかしながらテーマに沿った立体作品制作に関心を持たせると同時に、立体作品の各過程において各自の発見や考えを言葉に表し制作を通して伝えたいことを主体的に構想していく力を持たせる。
2014	1	40	12	デザインされたものについて、みる、知る、分ける	なぜを追求し形の動きを考えることでデザインの意味を理解する。また、意識していなかった身近な製品に興味を向けられるようになる。さらに、製品を様々な視点からとらえることで考えの幅を広げられるようになる。
2015	1	40	10	デザインに隠された背景を探らう	映像資料を通してデザインと社会との関係を探らせ、デザインと社会との関係を読み解く力を身につかせ、絶えず新しい技術や動向に留意し芸術性を追求する力を養わせる。



写真1 研究授業（2012年度）の様子



写真2 研究授業（2013年度）の様子



写真3 研究授業（2014年度）の様子



写真4 研究授業（2015年度）の様子

3. 研究授業後のアンケート結果

研究授業後、高校生にアンケートをおこなってきた。アンケート様式は、2012年度の教職履修学生と検討し作成したものを毎年利用している。これまでに回収できたアンケートは、2012年度：33枚、2013年度：39枚、2014年度：39枚、2015年度：35枚、合計146枚であった。アンケートの質問項目は表3の通りである。それぞれの質問に対する回答については紙面の構成上省くことにする。

表3 生徒へのアンケート項目について

記号	質問
ア	私たちの指導をどのように感じましたか？（表4）
イ	授業でもっと教えてほしかったことは何ですか？（表5）
ウ	説明や指導など分かりにくかった点について教えてください。（表6）
エ	指導されて気づいた点などありましたか？（表7）
オ	印象に残ることがありましたか？（表8）
カ	私たちをどのような存在に感じましたか？（表9）
キ	授業の感想や、私たちに対する助言など、自由に記入してください。（表10）

4. 考察

アンケート回答の集計結果の表は、紙面の都合上ここに掲載しない。しかし集計の際、すべての回答に通し番号として、「実施年の西暦下2桁一通し番号」をつけた。

以下の文章中のカッコ内に示す番号は、その回答の通し番号である。

4.1 質問記号アの回答の集計結果をもとに

「とくに何も感じない (13-4)、あせている感じ (13-16)、説明っぽい (13-34)、声が少し聞きとりづらい (15-11)、何をどうするのかもっと説明してほしい (15-12)、声が小さい (15-19)」などの回答が5%。無回答は1%、残りの94%は、分かりやすい、丁寧、よかった等の肯定的な回答であった。肯定的な回答の中に、グループごとに話しあえて楽しかった(14-14)、どの先生もしっかりと話してくれたり説明してくれた (14-25)、グループでまとめているときに分かりやすくアドバイスをしてくれた (15-6) などのような、個別の質問や困惑に対する配慮を評価する回答が見られた。

以上のことから、複数人の指導者で1つの授業に取り組むという本研究授業の特色にとって、効果的に実施する際の重要な要素であり、これからの研究授業において【生徒の個別質問や困惑に対する指導や配慮】が重要な点であると考えた。

4.2 質問記号イの回答の集計結果をもとに

「特になし・回答なし」29%、「各授業に関すること」61%、「大学での研究内容」10%となった。(本研究授業では、研究授業を行う前に、指導者となる学生に自己紹介を兼ねた自身の大学での研究内容について発表を行わせている。)「各授業に関すること」は、各授業年度によって内容が異なる点があるため内訳を示す。

2012年度の回答のうち75%に、授業でもっと教えてほしかったデッサン技術について記入されており、デッサン技術向上のための興味関心の高さが分かる。2013年度の回答のうち43%に作品例や作り方のコツなどを教えてほしかったという内容が見られ、発想の知識向上や制作技能の向上に対する意欲の高さとともに、学習に必要な情報について考える必要もあることが分かった。2014年度の回答のうち58%に授業で説明を受けたペットボトル以外の、形の由来やデザイン性について知りたいという内容が多くみられ、授業テーマに対する強い興味関心につながっていることが分かった。2015年度の回答のうち68%に授業を理解するうえで必要だった知識についての記述が多くされており、学習に必要な情報提供が不十分であったことが分かった。

以上のことから、【学習のテーマにあわせた情報の絞り込みと情報の深さ】が、生徒の主体的な学習意欲を高める重要な点であると考えた。

4.3 質問記号ウの回答の集計結果をもとに

「特になし・回答なし」58%だったが、「声が聞き取りにくい」23%、さらに、「指導する身でいらっしやるのですから、もっと堂々となさって良いと思います (15-24)」という回答もあった。

以上のことから、指導者の声の大きさは使用する教室によっても影響されるが、基本的に学生の声量は十分とは言えないと考える。【生徒を不安にさせない声量・声色・態度で授業に取り組む】ことについて重点的に取り組みたい。

4.4 質問記号エの回答の集計結果をもとに

「特になし・回答なし」23%、「指導について」15%、「授業関連・各自の気付き」62%。「授業関連・各自の気付き」のうち、各研究授業のキーワードのような言葉を用いた回答をしているのが、面・見えない所を意識すること (12-1)、見せるという意識が大切なのだなと気づかされた (12-5)、手順や計画が大事 (13-7)、材料の観察 (13-8)、テーマ・実験の大切さ (13-30)、デザインには色々な意味が込められている (14-1)、デザインには無意味なものはない (14-6)、デザインに意味がある (14-14)、デザインと社会の関係性 (15-4)、デザインは社会と深く関わっている (15-9)、デザインと社会の相互関係 (15-25)、社会とデザインの結びつき (15-33) 等が見られた。授業後の生徒の意識に学んだ内容のキーワードを記憶させるには、学ぶ過程において繰り返しそのキーワードとの関連について再考させ理解を深めさせることが重要になる。実施年度が進むほどに授業のキーワードが回答されるようになってきていると思われるため、今後も【学習理解を深めさせる学習キーワードの活用】を重要視していきたい。

4.5 質問記号オの回答の集計結果をもとに

「特になし・回答なし」12%、「指導者・指導について」39%、「授業関連・各自の気付き」49%。この質問項目においても、各研究授業のキーワードのような言葉を用いた回答が、2014年度研究授業の回答 (14-1、14-8、14-13、14-15、14-16、14-17、14-19、14-21、14-33、14-34、14-35) で多く見られた。さらに2015年度研究授業の回答 (15-10、15-23、15-26、15-34) でもあった。

以上のことから研究授業の1回目及び2回目よりも、3回目及び4回目において、学ぶ内容を理解させながら繰り返しそのキーワードとの関連について再考させる指導が重視されつつあると思われた。そのため4.4で示した【学習理解を深めさせる学習キーワードの活用】について改めて重視したいと思う。また「指導者・指導につ

いて」にあてはまると思われた回答は、質問記号アの回答と共通する内容のものが多くあった。今後の研究授業においても、研究授業を行う多数の指導者の一人ひとりの個性を保ちながら、4.1で示した【生徒の個別質問や困惑に対する指導や配慮】を重視していきたい。

4.6 質問記号カの回答の集計結果をもとに

「先生」38%、「お姉さん・お兄さん」8%、「大学生・先輩」12%、「その他」40%。その他の回答としては、具体的な人物として示されておらず、やさしいや頼れるなどといった抽象的な表現になっていた。しかし回答なし以外は全て、好感の持てる対象として回答されていた。

以上のことからこの集計結果をもとにしても、4.1で示した【生徒の個別質問や困惑に対する指導や配慮】を重視していきたい。

4.7 質問記号キの回答の集計結果をもとに

「回答なし」14%、「感謝やはげまし」38%、「分かったことやできたこと」20%、「グループワーク・プレゼンテーション」7%、「外見・指導に対する対応や態度」21%。「分かったことやできたこと」の回答の中で、各研究授業のキーワードになるような言葉を用いていたのは、13-2、15-1、15-22、15-26、15-29、15-31であった。つまりアンケートの自由記述部分においてもキーワードが多く示されたのは2015年度の研究授業であることが分かった。今後の研究授業においても2015年度の指導過程を参考にしながら4.4で示した【学習理解を深めさせる学習キーワードの活用】について改めて重視したいと思う。

また「グループワーク・プレゼンテーション」の回答を見ると、グループワークの内容を示していたのは、12-10、12-15、13-7、14-1、14-2、14-21、14-29、14-30、15-28となっており、2014年度におけるグループワークの指導が最も注目されたことも分かった。このことから2014年度のグループワークの指導過程を参考にしていきたい。さらにプレゼンテーションについての内容を示していたのは、12-15、12-32。12-32の回答には、「普段の授業でも、このような時間や機会を入れてほしい」という表現になっていた。このことは実習の授業内容であっても、生徒同士の意見交換の場を設け、制作だけで終わらない方が効果的になるかもしれないと予測できた。以上のことから【グループワーク、プレゼンテーションの活用】を今後の研究授業で重視していきたいと思う。

さらに「外見・指導に対する対応や態度」にあてはまった回答のうち、もっと大きな声で話してほしいとする内容が7回答。シャツのボタンをきちんと閉めることや、

髪型に関することなどが3回答あった。また「ホワイトボードは黒板よりも見えにくくなるので太く大きく書く」とよいとす回答もあった。そこで4.2で示したまとめを改善し【学習テーマにあわせた板書や配布資料を活用した情報の絞り込みと情報の深さ】とし、今後の活動において早急に対応していきたい。

4.8 考察のまとめ

以上4.1から4.7までの考察をもとに、多数の指導者で実施する研究授業に向けた今後の課題を次のようにまとめる。

- ① 生徒の個別質問や困惑に対する指導や配慮
- ② 学習テーマにあわせた板書や配布資料を活用した情報の絞り込みと情報の深さ
- ③ 生徒を不安にさせない声量・声色・態度で授業に取り組む
- ④ 学習理解を深めさせる学習キーワードの活用
- ⑤ グループワーク、プレゼンテーションの活用

5. おわりに

2013年度にマカロニを用いて研究授業をおこなった。普段よく食する物を用いたため多くの生徒が、学校で何を学んだかを家族に説明し、説明された保護者は美術について子どもと話し共通理解を得られた。保護者はこのエピソードを大変うれしく感じたそうで、保護者面談の際に高校教員は大変感謝をされたそうである。生徒に提供される授業が、単に生徒の学習を支えるだけでなく、日常や社会へのつながりを実感させる機会になると考える。そのためにも教職課程を学ぶ大学生だからこそ発案・提供できる題材を、今後も高校側と連携しながら取り組んでいきたいと思う。

注釈

- *1 中学校・高等学校教員（美術・工芸）の免許資格を取得することのできる大学「通学過程（1）一種免許状（大学卒業程度）」p.2、http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/12/01/1287063_1.pdf
- *2 2012（H24）年度における美術科教育法Ⅰの授業担当者は、齋藤晴之、ペルトネン純子。美術科教育法Ⅲの授業担当者は、後藤敏伸、ペルトネン純子。
- *3 2013（H25）年度以降における美術科教育法Ⅰの授業担当者は、ペルトネン純子。美術科教育法Ⅱ及びⅢの授業担当者は、ペルトネン純子、平田昌輝。